

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】合原 織部

【所属】(助成決定時) 京都大学 人間・環境学研究所

【研究題目】

ヒマラヤオオミツバチをめぐる人類学的考察
—ネパールグルン族の採蜜活動の変容に着目して

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、ネパールのグルン族のあいだで生業として営まれてきたヒマラヤオオミツバチの蜜の採集活動に着目し、近年、その民族観光化がすすめられるなかで、従来の生業や地域の生態系に及ぼす影響を明らかにすることにある。しかし、調査を続けていく中で、調査村において採蜜を行うリーダーが体調を崩したために採蜜活動が行われない時期が続くという状況に直面した。従って、ネパールにおける現地調査については、現場の状況に合わせて時期や期間を調整する必要が生じた。そこで、ネパールの研究を続行しつつ、申請者が同じミツバチと自然環境の変容をめぐる研究として進めている、九州の山村を対象に調査を行った。近年、世界的にミツバチの生息数の減少が報告されており、ミツバチは植物の受粉を担うために当該地域の生態系や、農作物の生産などの食料供給にも影響を及ぼすため国連も対策を急いでいる状況がみられる。本研究では、このような状況に着目し、ネパールと日本の事例を比較検討する予定にある。ここでは、宮崎県で行った調査の結果と考察を報告したい

【研究の内容・方法】(800字程度)

宮崎県椎葉村は、標高 1000m を超える 33 の山々に囲まれた山村であり、その環境に即した独自の生業が営まれてきた。なかでもニホンミツバチの養蜂は 300 年以上に渡り継承され、人々は蜂蜜を食物や薬として生活に取り込んできた(椎葉村編 1960)。しかし、近年当地域では過疎化が進行し、生業活動に従事する人々が減ったことにより、野生動物が侵入しやすい環境となり獣害が深刻化している。獣害の深刻化は、養蜂活動にも影響しており、急増したイノシシやシカが山の植物を過度に食するためミツバチの生息環境を破壊することにより、その生息数が減少している。

獣害によるミツバチの生息数の減少は、従来の養蜂文化に影響を及ぼすのみではなく、ミツバチは植物の受粉を担う存在であるため、当地域の農作物の生産などの食料供給にも影響を及ぼしていることが明らかとなった。

これまでの椎葉村の養蜂を扱った先行研究(飯田 2013 ; 山口 1998 ; 吉田 2005 など)は、主に、「伝統的」生業としての養蜂に着眼しており、養蜂家による巣箱の作成、設置、蜂蜜の採集などの採蜜の詳細や、地域の蜂蜜消費のあり方を明らかにしてきた。しかしこれらの研究は、前述したような、獣害が深刻化しミツバチの生息数が減少している今日の状況が、いかに当地域の採蜜文化や農作物の生産に影響しているのかという点を考察してこなかった。そこで本研究では、ミツバチを当地域の生態系を維持する重要なアクターとして捉え、今日の山村におけるミツバチ、人間、イノシシ、シカ、農作物、蜜源植物などの複数種の関係性の実態を明らかにすることを目的とする。近年の獣害が、いかにミツバチの生息や生息環境、また蜜源植物や農作物などの植物相に影響を及ぼすかという生態的側面に加え、それがいかに従来の地域の採蜜文化に影響するかという文化的側面に及ぼす影響も明らかにする。

研究方法

本研究は、宮崎県椎葉村における長期調査と論文執筆から成る。調査は、2018 年 10 月から 2019 年 5 月までの期間に行われた。椎葉村において近年獣害が深刻化している状況に着目し、①ニホンミツバチの生息数の減少を引き起こしている実態を明らかにし、それが、②当地域における農作物の生産や生態系全体に及

ぼす影響や、また③従来の採蜜文化に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

【結論・考察】（４００字程度）

獣害がミツバチの生息数の減少をもたらしている理由には、自然環境の変容によりミツバチに適した環境が維持できないことがあげられる。一点目に、採餌植物が 1000 種類を超えるとされるシカが近年急増し、山の植物を過度に食すためにミツバチの生息環境が破壊されていることがあげられる。役場や現地の住人を対象とした聞き取り調査からは、約 38 種の植物の受粉に問題がみられることがわかった。二点目には、里に侵入したイノシシやシカが、養蜂家が設置するミツバチの巣箱を踏み倒すことによって、ミツバチの生息を妨げている。当地域のミツバチの生息数の減少を引き起こしている要因は、獣害のみではなく、農薬の導入や、植林政策の結果スギやヒノキが山林の大部分を占めたことにより、蜜源植物が減ったことなど、様々な原因が合わさったものである。しかし、本研究の調査からは、獣害による自然環境の変容が、ミツバチの生息に影響していることが明らかになった。

また、ミツバチの生息数の減少の実態に関しては、夜狩内地区を対象に、5人の養蜂家とともに地域に設置された巣箱を調査した結果、ここ8年ほどでミツバチの生息が確認できる巣箱の数が減っていることが明らかになった。8年前には85の巣が確認されたが、2019年には30のみであることがわかった。今後の調査では、ミツバチと地域の植物の受粉の関係のより具体的な詳細を生態学的な知見も併せて明らかにする。